（様式５）　　令和２年度　　教職大学院派遣研修　研究報告書

派遣者番号	Ｒ２Ｋ１９	氏　名	武田　理史
研究主題 ー副主題ー	「対話」による児童の思考過程の変容 ー小学校社会科「日本の米づくり」の授業実践を通してー		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	井ノ口 哲也
所属	西東京市立保谷小学校	所属長	野崎 信行

キーワード：　対話　思考過程　変容　米作り　参加スタイル

１　研究の目的

児童が生きるこれからの社会は、技術革新による急速な変化によって生活そのものが大きく変わっていくと考えられている。同時に現代社会では、食料の安定的確保、世界的な気候変動など、無数の問題を抱えている。このような中、複雑な問題に柔軟に対応するために、他者との「対話」を通して相互理解に努めたり、新しい解決策を模索しながら新たな知識を継続的に生み出したりしていくことがより一層求められている。

小学校社会科においては「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、課題の解決のために社会への関わり方を自ら選択・判断し、他者との「対話」を通じて新たな考えや態度を形成していくことがより一層求められているが、そのような場面における「対話的な学び」の形骸化が起こり、学習活動の効果が十分でないことが指摘されている。

本研究では、先行研究の知見を生かしながら、児童が必然性をもって取り組む「対話」を通じて、自分の考えを再考・確認し、新たな考えや態度を形成することを想定した小学校社会科の指導計画を作成する。そして、実践を通して得られた児童のノートの記述や、授業における発話記録を基に、児童の思考過程の変容を分析・考察し、その成果を今後の授業改善に生かすことを目的とする。

なお、主題にある「対話」について、本研究では授業におけるやり取り全般を指す。具体的には、教師と児童との会話、児童同士の会話、他者の意見を聞いての自己内対話等である。

２　研究の内容・方法

小学校社会科第５学年「米づくりの盛んな地域」において、２学級における実践を対象とした。米は日本の主食であるため、米作りは産業学習の中でも児童にとって身近な題材であるといえる。しかし、近年日本の米作りが抱える多くの課題については、児童が切実性をもった認識をしているかと言えば、そうでない現状があると考える。

本研究では学習したことを基に、日本の米作りの持続可能性について必然性をもった「対話」を通じ、児童の思考がどのように変容するのか、ノートの記述を基に分析を行う。分析は「対話」前後の二つの記述から、それぞれ特徴を読み取り、コードを付け、更にカテゴリー分けして変容を個別に読み取ると同時に、クラス全体の変容の傾向を捉える。また、授業への参加スタイルが異なる３名の児童を抽出し、「対話」の発話記録とノートの記述との関連を図りながら個別に考察を行う。なお、本研究で着目する参加スタイルとは、授業で「よく発言する児童」、「たまに発言する児童」、「全く発言していない児童」とし、参加スタイル別の授業への関わり方と記述について考察し、児童の思考過程の変容を明らかにする。

３　研究の結果

「対話」の前後（第９時と第10時）の児童のノートの記述を比較し分析したところ、２学級合計では、自分の考えの根拠が変容した児童の割合が最も多く、次いで願望や当事者意識等の態度面の変容が見られた（図１）。一方で、学級別にみると変容のパターンの割合が大きく異なることが分かった。

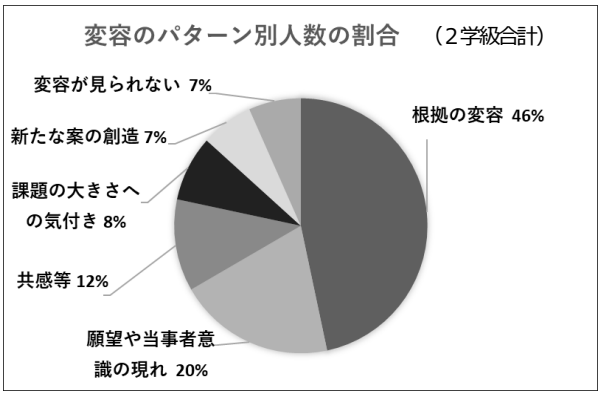

図１　変容パターン別人数の割合

また「対話」への参加スタイルが異なる抽出児童３名のノート記述を基に、思考過程の変容に影響を与えたと思われる授業の場面を関連付け考察した。参加スタイルが異なる児童とは、「よく発言する児童」（発話数７回）、「たまに発言する児童」（発話数４回）、「全く発言していない児童」（発話数０回）の３名である。順に、授業で複数回発話し、他者と直接やり取りしたことが思考の変容につながった事例、数少ない発話回数ではあるが、課題解決の方策についての考えが個別具体的な取組から他者との協力関係による取組へと概念変化した事例、児童自身は発話していなくとも、その児童の授業への参加スタイルそのものが記述の変容につながった事例と、それぞれの参加スタイルに応じた変容の姿が見られた。

４　研究の考察

記述の分析から、どちらの学級も考えが変容している児童が多数であることから、「対話」を通して自分の考えを再考し、新たな考えや態度を形成することを目指して行われた本実践が、一定の効果を上げていると考える。しかしながら、変容のパターン別人数の割合は、学級ごとに大きく異なっていたことに着目したい。指導者と指導計画が同一でありながら、変容のパターンに違いが現れているのは、当然ながら両学級の児童の実態や授業の流れ、発話内容等の要素が異なっていることが要因と考えられる。そのため、児童の思考過程の変容には、指導計画以外の要素が影響している可能性があると推測する。すなわち「対話」の充実のためには、児童が必然性をもって「対話」に向かう学習の構造に加えて、児童同士の関係性や教師の発話等の要素もまた大きいということになる。そのため授業改善の方向性として、お互いの考えについて数多く検討する場面を設定することも重要であるが、児童の発言の質や影響力等に見られる児童同士の関係性や、それらを踏まえた教師の発問や指名、問い返しもまた「対話」の充実には重要な要素と言える。

発話の分析では、授業における発話の多少に関わらず、ノートの記述が変容している児童が多いことが明らかになった。よって本研究では、発話数が児童の思考過程の変容にただちに影響を与えていると単純に捉えることはできない。発話していなくとも思考が十分に変容していると考えられる児童が多く確認されたことからも、児童は様々な参加スタイルで「対話」し、他者の意見に傾聴しながら自分の考えを再構成していることが分かる。つまり、児童の学習に向かう日常的な姿勢や他者への関わり方そのものが、学習の成果に大きな影響を与えていると言える。本実践では、思考の変容が見られない児童や、変容はあっても記述内容を筋道立てて考えることに課題がある児童が確認されている。その課題解決の視点として、一人一人の授業への参加スタイルを尊重しつつ、様々な参加スタイルを教師が価値付けながら、その児童に必要な支援を講じていくことが挙げられる。「対話」の充実のためには、授業への多角的なアプローチによる授業実践が必要である。

５　今後の展望

本研究で明らかになった児童の思考過程の変容の姿を所属校において伝達・共有し、研究成果の普及・啓発を通して、校内研究における授業改善や日常の児童理解に役立てる。また、本実践のような産業学習における学習構造や価値判断場面の対話的活動は、他の産業学習にも活かすことができると考えている。所属する市や東京都の研究会等において継続的な実践を行い、東京都の若手教員育成に資する有効な視点を養っていきたい。